

---

# 悠久セレナーデ

本風 夕李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悠久セレナーデ

### 【Nコード】

N7249M

### 【作者名】

本風 夕李

### 【あらすじ】

「好きです。」男子校に通う俺、春川柚希にそう伝えてきたのは、れっきとした同じ男でした。

まっすぐな少年とやや強情な少年の恋愛模様。スローペースな恋愛が好きな人向けです。

## 登場人物紹介（前書き）

BL作品です。

苦手意識のある方は閲覧をご遠慮くださいますよう、よろしくお願い致します。

大丈夫な方のみ先にお進みください。

## 登場人物紹介

はるかわ ゆずき  
春川 柚希

整った中性的な容姿故、生徒に告白されること数知れず。しかし本人はノンケ。

華奢だが力があり、運動もそこそこできる。

基本的にはクールというか、素っ気ない。ただし健太は特別。

みつだ ゆいと  
三田 結斗

サッカー部所属のスポーツ大好き少年。勉強は少し苦手で音楽が好き。

人当たりも性格も良いが、少々気弱で強く出られない部分がある。

きしべ けんた  
岸部 健太

柚希の親友。温厚な性格で、柚希の数少ない理解者。

運動は並の成績、勉強は得意。クラスの中では安定した信頼を得ている。

随時増えます。

## 告白

>br<「あつ、あの…！」

昔から、変なものに好かれることが多かった。

動物にも好かれる。少しばかり変わった人間にも好かれる。

天性なのよ、と幼い頃に母親に言われてしばらくは誇らしく思っていたこともあったけど、今はそうでもない。所詮、変なものは変なものだ。たまに周りの目が冷たくなることだってある（動物ならまだしも、人間は特にな…）。

「何？」

「俺、三田結斗っていいですよ！その…っ、俺と、付き合ってくださいー！」

「……………は？」

ほら、また変なのがきた。

\*

がやがやと騒がしい廊下。にも関わらず、三田と名乗った奴の爆弾発言によって視線は全てこちらに向けられている。居心地悪すぎだ。なんだなんだと興味本位の瞳が周りを埋め尽くす。

「……………」

「俺のこと、知らないかもしれないけど…実は俺、ずっと前から…」

っ！」

「なに？マジ告白？さすがモテるな春川！」

野次の1人がそう囁し立ると、周りは更に盛り上がってしまった。爆弾発言した張本人は変にあわあわしてるし、居心地の悪さは最高潮。

「えっと…三田くん、って言ったっけ？」

「あ、うん！三田結斗！」

人当たりの良さそうな笑顔を浮かべて、三田は自分の名前をも一度言った。

「三田結斗、ね。とりあえずぶっ飛ばす」

「え…」

三田が何かを言う前に、三田の頬に向けて拳を振るった。急なことで受け身さえも取れなかったらしく、三田は盛大な音を立てて壁にぶつかる。

殴られた頬に手を添えながら、呆然とした目が向けられた。意味がわからない、そう書いてあるんじゃないかってくらいの顔。

「悪いけど、俺そういう趣味ないから。他あたって」

「ちよっ、春川！待って！」

三田の声を背中であけつつ、俺はその場から足早に離れた。俺を避けるように人混みが割れる。また記録更新だな、という小さな声が聞こえた。

何が記録だよ。他人事だと思いやがって。  
俺の真剣な悩み事を、笑い話にしやがって。

### 三田、再び

>br<ぱつちりとした二重の瞳。お世辞にもたくましいとは言えず、寧ろ逆に華奢な身体。運動はできるのに白さを保っている肌。地毛にしては明るめの髪。

俺には男を主張する要素が昔から少なかった。

可愛い、可愛いと周りは口を揃えて言う。それはいつまで経っても変わらなくて、俺はそれが嫌だった。

大きくなったら、と未来に願をかけた所で思ったようにたくましくなる訳でもなく、高校まで進んでしまった。

何を思ったか男子高に進んだは良いものの、男だらけの空間では逆に自分の華奢さが目立ってしまう。

進路を安直な考えで決めた過去の自分を呪いたくなった。

そしてただの都市伝説だろうと思っていた男子高の同性恋愛。それは決して嘘ではなく、生徒の中で限りなく女に近い俺は多くのタチ側のターゲットになっていた。死にたい。>br<>br<俺はノンケであることを主張するべく、告白というものをしてきた奴全員をフっている。さっきの三田のように、強い拳を添えて。>br<男なら拳で語れ…っていうのはただの建前で、ただの苛立ちを具現化したものとも言える。>br<>br<>br<「俺、そんなに男受けいい顔してる？」>br<「さあ？まあ、可愛いのは否定しないけど」>br<「健太も結構酷だよ…」>br<「俺は事実を言っただけだよ」>br<>br<岸部健太。もう小学生からの付き合いになる。>br<長いこと俺の傍にいたせい、俺の苦勞



をわかつてくれる数少ない理解者だ。>br<>br<「何のためにあんな断り方してると思ってたんだよあいつら…」

「そういえば、春川柚希のツンデレは攻略し甲斐があるとかいう噂聞いたな」

「なにそれ!？」

誰だそんな噂流した奴。俺が直々にぶっ飛ばしてやりたい。

頭を抱える俺に小さく笑って、よしよし、と健太は俺の頭を撫でた。

「大丈夫。柚希がかっこいいこと、俺知ってるから」

「健太あ…!」>br<>br<ホントこいつはイケメンだ。俺が女だったら惚れてる。あくまでも、女だったら。>br<>br<ありがと、と口にしようとした瞬間、教室に俺の名前が大きく響いた。>br<しかもその声は、ついさっき聞いたばかりだったような。>br<>br<「春川っ!」>br<「…三田、結斗?」>br<>br<ついさっき殴ってつたはずの相手は、小さく息を弾ませてまっすぐ俺を見ていた。

## 友達になって

>br<三田は少しだけ気まずそうな表情を見せた後、意を決したような瞳をして俺に近付いてきた。

「あの、春川…」

「何？」

「さっきのこと、少し話したいんだ…時間、ない？」

おずおずと問われる。どうしたもんかと考えていると、とん、と健太が俺の肩を叩いた。

「いいんじゃない？話くらい聞いてあげれば？」

「お前、仮にも親友だろ。心配じゃないの？」

「三田はそんな奴じゃないよ」

ね、と三田本人に笑いかける健太。三田は少し驚いていたみたいだけど、やがてぶんぶんと首を縦に振った。

…まあいざとなったら逃げればいいよな、なんて。

「…わかった、いいよ」

「あ、ありがと。じゃ、少し春川借りるね」

「ん。いつてらっしゃい」

俺は貸し出し可能物か。

そんなことを思う俺を知ってか知らずか、にこにこ微笑む健太に見送られて俺は三田の後について教室を出た。

\*

「…で、話つて？」

切り出したのは俺の方。

人気の少ない中庭に連れて来られ、俺は正直何の話なのか見当もつかなかった。

付き合つて欲しいっていう件なら一瞥して帰ればいい。けど三田の表情は少しばかり神妙だ。

「えつと…さっきのこと、で」

「うん」

「その…ごめん」

「……ん？」

「だから、ごめん。後で冷静に考えてみたら、急にあんなこと言われたら普通引くよなつて」

俯き加減のまま、三田は呟くように言った。

この言葉は少し予想外で、俺は何も言わず黙り込む。

「っでも、さっき言ったことは嘘じゃないんだ！俺は本当に春川が好きで…うん」

うん、じゃねえ。何を一人で納得してんだこいつ。

しかしこの雰囲気ですんなことを言えるはずもなく、俺はただ三田

の顔を見つめるしかできなかった。

「…1つ、頼みがあるんだ」

「頼み？」

「うん」

反復するように答えると、三田はしっかりと俺の瞳を見た。  
真剣な視線に、ちょっとした緊張感を覚える。威圧されたような感覚。

次に三田の口が開いた時、俺の身体は少しだけ強張った。

「頼む！俺と、友達になってくださいっ！」

「……………は？」

強張ったはずの身体からはすぐに力が抜け、俺は告白された時と全く同じリアクションをとってしまう。

なんなんだ、この男は。

## 新しい友達

>br<友達になってって、こいつはいきなり何を言い出すんだ。

「…何言ってるの？意味わかんないんだけど」

「あ、いや、その、俺このまま春川に避けられたりすんの嫌だから…！」

聞いてみれば、随分と身勝手な理由。

三田は焦ったように、ああでもないこうでもないと言葉を探している。

「…ホントはちゃんと場数を踏んで言わなきゃって思ってたんだ。でも、いざ春川と向き合ったらテンパっちゃって…」

殴られた後に言うこと間違えたって気付いた、と呟く。

…こいつ、実はすごくバカなんじゃないか。

「絶対何もしないから！好きだとか言わないし、変な目で見たりもしない！だから、その…」

一度伏せられてすぐに戻った瞳には、不安の色が見えた。

しかもそれはまっすぐ俺に向けられている。

「俺と、友達になってくれませんか…？」

こんなのずるい。まるで泣き落としだ。

こんな状況で断ったら、明らかに俺が酷い奴じゃないか。

誰に見られてる訳でもないはずなのに、俺の心には断ることに関しての罪悪感が積もる。

「…それで、あわよくば俺が自分を好きになってくれたらってこと？」

「っそれは…完全に否定はできない、けど」

「……………」

「でも俺、ホントに…！」

はぁ、とため息を吐く。三田が肩を震わせて黙った。

「…いいよ」

「……え？」

「友達になるくらいならいいよって言ってるの」

三田は俺の言葉に呆然としたまま動かない。

眉をひそめると、はっとしたように顔色が変わった。

「え？え？ホントに？ちよっ、これ夢じゃない!？」

「は？三田、まず落ち着け」

俺の言葉も聞かず、三田はぎゅうっと自分の頬をつねる。

よっぱど加減せずにつねったのか、すぐに頬を押さえてうずくまっていた。

「い、痛い…！」

「そりゃそうだろう！何やってんだよお前！何か怖い！」

俺がそう言つと、三田はゆっくり顔を上げて笑つた。

さっきの痛さのせいか、ほんの少しだけ涙目になっている。

「へへ…やばい、超嬉しい」

「……ったく」

そこまで嬉しそうに微笑まれたら、なんか照れるだろ。

そんなことを思いながら、俺は三田に手を差し延べた。三田はその手を掴んで立ち上がる。

近距離で、三田の笑顔を見た。

「ありがと、春川」

「…一応言つとく。俺は絶対男なんか好きにならないからな！」

「ん。大丈夫、頑張るよ」

「違つだろ！」

やっぱり俺は、変な奴に好かれるらしい。

## 親友と新友

>br<翌日。

「春川！一緒に食べていい？」

「おー。いい？健太」

「…いいけど」

さも当然のように教室へ来た三田に、健太は驚いたみたいだった。

じつと不思議そうに三田を見る健太。三田は小さく首を傾げ、何？と尋ねた。

「いや…何、付き合うことにしたの？柚希」

「違うよ。友達」

「…友達？」

訳がわからないと言わんばかりの声色で健太が反復した。

「春川に俺の我が儘きいてもらったんだ。俺と友達になってくれって」

三田がそう言うと、ふーん、と健太は頷いた。

その視線は三田から俺に移ってきて、じつと俺を見る。

「…なに？」

「いや、別に。えっと、俺は岸部健太ね。よろしく」

「三田結斗！よろしくな」

「……？」



健太の反応を変に思いつつ、俺は昼ご飯のパンの袋を開けた。

今まで話したことがなかったから知らなかったけど、三田は結構気さくな奴で、それなりに評判もいいらしい。

話してて面白いなあと思うことも割と多く、でも思ってたより温厚な性格みたいだ。

「そっいえば三田、サッカーやってんだって？」

「ああ、うん。運動するのが好きなんだ、俺」

「柚希、1年の三田っていったらサッカー部のホープだよ」

「え、そうなの？」

「それは周りが勝手に言ってるだけで……！岸部、変なこと言っくなよ！」

三田は照れたように頬を赤く染めながら少しだけ声を荒げる。  
褒められるのが苦手なタイプなのか。

パンにかじりつきながらそんなことを考えると、健太がまた口を開いた。

「柚希、今度サッカー部の練習見に行こうか。三田が参加してる時に」

「んー…でも午後の部活って校外の生徒が来てるじゃん。しかも女子ばっか」

黄色い声なんて聞こえるはずがないうちの学校で、唯一耳にする時

間は午後の部活だ。

野球、バスケ、サッカー。

そついった運動部には必ずと言っていい程に女子が歓声を上げている。

「三田くん、とか可愛い女子に呼ばれてんじゃない？」

「まあまあ、それも面白そうじゃない？」

俺のからかいに苦笑いだった三田の代わりに、健太が答える。

行こうよ、と続いた言葉に俺は了承した。

「そのうち気が向いたらな」

「え、ホントに来るの？」

「行くよ。何、見られて困ることもしてんの？」

違うけど…と歯切れの悪い答え方をする三田。

意味がわからなくて健太を見ても、どうやら健太はわかっているようにでくすくすと小さく笑うだけだ。

「大変だな、三田。めげずに頑張れよ」

「…他人事だと思ってるだろ」

「だって他人事だし。ね」

ね、と言われても、俺には何の同意を求められたのかがわからない。

とりあえず、三田と健太は仲良くやれそうだと頭の隅でぼんやり思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7249m/>

---

悠久セレーデ

2010年10月28日00時44分発行